SPECIAL ARTICLE 特集

アルコール依存症治療における断酒と飲酒量低減

4 内科外来におけるアルコール関連肝疾患患者に対する断酒，飲酒量低減指導の実際

Current educational program by a physician for reduction of alcohol intake and abstinence in the patients with alcohol-related liver disease

医療法人社団健育会
湘南慶育病院消化器内科 部長

堀江 義則
Yoshinori Horie

Summary

欧州肝臓学会（EASL）では，alcohol-related liver disease（ARLD）を，男性 30g/日以上，女性 20g/日以上の飲酒に関連した肝疾患と定義している。当院内科外来にてARLD患者に簡易介入を行い，有意な減酒効果を認めた。簡易介入のみでは飲酒量の低減に結び付かない症例に対し，内科外来で飲酒量低減薬のナルメフェンを処方した症例においてその有用性を検討した結果，24週以上経過した18例中11例で飲酒量の低減と肝機能の改善を認めた。ナルメフェン投与が内科外来における飲酒量低減治療の新たな選択肢となるが，肝硬変まで至ったような例では飲酒量低減は中間目標であり，最終目標の断酒を目指すべきである。ナルメフェン投与で減酒後に再度飲酒量が増え，専門医療機関入院に同意され，紹介受診となった例も経験した。指示的な断酒要求は通院拒否に繋がることもあり，信頼関係を築くなかで，本人の意思で専門医療機関受診や断酒をしてもらうことが必要である。

Key Words　アルコール依存症，飲酒量低減，断酒，ナルメフェン，アルコール関連肝疾患

はじめに

わが国のアルコール消費量は今世紀に入り徐々に減少傾向を認めていたものの，最近の10年間はピーク時のレベルの約90%に留まり，ほぼ同じレベルにある[1]。国際疾病分類 第10版（ICD-10）でアルコール依存症と判定される人数が人口の1.0%（男性 1.9%，女性 0.2%，全体で約107万人）と推計されており[2]，このなかからアルコール性肝炎（alcoholic hepatitis：AH）やアルコール性肝硬変（alcoholic liver cirrhosis：ALD-LC）などの重度のアルコール性肝障害が高頻度に発生していると考えられる。

20歳以上の総合病院を受診した外来患者を対象にした飲酒量とアルコール依存症のスクリーニング・ツール「CAGE」を用いた患者調査では，アルコール依存症の疑い群が全科平均で男性が21.6%，女性が10.1%であった[3]。入院施設のある総合病院では身体症状や健康診断での有意な異常値を伴ったアルコール使用障害者が多いと推察される。そのため内科診察は身体的な疾患を通してアルコール使用障害早期発見の絶好の機会となるため，早期介入のシステム化が期待される。「第2期アルコール健康障害対策推進基本計画」が2021年3月に閣議決定され，取り組むべき施策として，「アルコール健康障害の早期発見，早期介入のため，一般の

SAMPLE
Copyright(c) Medical Review Co.,Ltd.